

持続可能な機関リポジトリに向けて 金沢大学学術情報リポジトリKURAの目指す方向

第8回データベースフォーラム／金沢大学データベース研究会
(2009年3月19日、金沢大学総合メディア基盤センター)

金沢大学情報部情報企画課
情報企画係長 橋 洋平

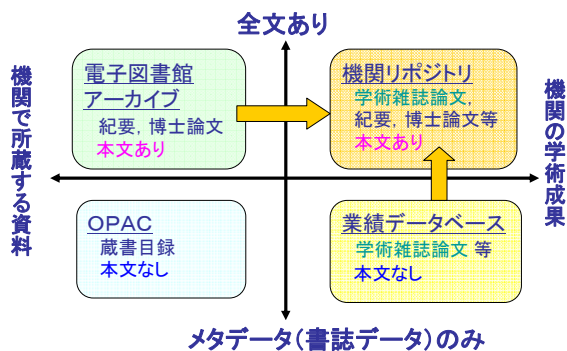


発表の目的・内容

- 金沢大学学術情報リポジトリ(KURA)を事例として、**機関リポジトリ(IR)**を持続的に運用するための条件について考察すること
- 前提として、**KURAの特徴・現状**を説明
- 今年度行った**カスタマイズ内容と運用方法**についての紹介
- 今後の展望

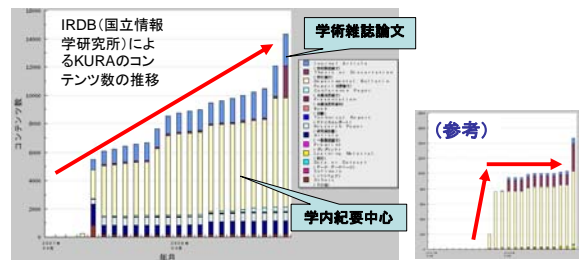
→各大学でIRを維持するための条件の考察

機関リポジトリとは



KURAの特徴

- あまり特徴はない。地味である。
- しかし、登録件数は**着実に増加**している。



KURAの問題点

1. 業務がマニュアル化されていない。
2. 登録の効果がユーザーにフィードバックされていない。
3. **研究過程に完全には組み込まれていない。**

IRを持続するためには？

- 一般論として、**利用者からの支持**の必要性
- 大学がIRを運営することについて、利用者、特に教員から理解・支持されている必要がある。

→**トップダウン**で理解されているはず...
しかし、本当に理解されているかは？

→**個別に反対意見**が... 例えば...

IRのどこが理解されにくいのか？【1】

【Q1】IRでなくても電子ジャーナルで十分では？

→【A】読めない人も読めるようになります。

【Q2】優先すべきコンテンツがあるのでは？

→【A】紀要・博士論文などの大学オリジナル・コンテンツは登録完了。次は学術雑誌論文へ

【Q3】労力がかかり過ぎでは？

→【A】今の時代、業績データベースへの登録は必須。データ流用すれば、労力はかからない。

IRのどこが理解されにくいのか？（2）

【Q4】なぜ“著者最終稿”にこだわるのか？

=最終稿の登録は避けたい / 残っていない

→【A】可能な分だけで結構です。ただし、「読めない人も読めるようになる」というのは大きなメリット

主に学術雑誌のオープンアクセスの部分についての反対・無理解が多い。

→段階を追って、IRについての理解を深めていくべきではないか？

IR進化の3段階とKURAの現状

【段階1】学内刊行物のプラットフォームとしてのIR
紀要、科研費、博士論文...IRならではのコンテンツ

この辺が当面の課題

【段階2】業績DBのオプションとしてのIR
業績DBにもう一手間かけたもの

ただし、まだ浸透していない。要制度化

【段階3】著者の権利の行使の道具としてのIR
オープンアクセスの支援。IR本来の目的。
しかし、なかなか理解を得られない部分でもある。

KURAは、(結果として)この順に進んでいる。

KURA今年度の事業(1) 学内刊行物のプラットフォームへ

ポータル化と電子ジャーナル的見栄えの実現

KURA今年度の事業(2) 著者の権利の支援

リーフレットの作成
統計をフィードバックするツールの作成 = 有用性のアピール

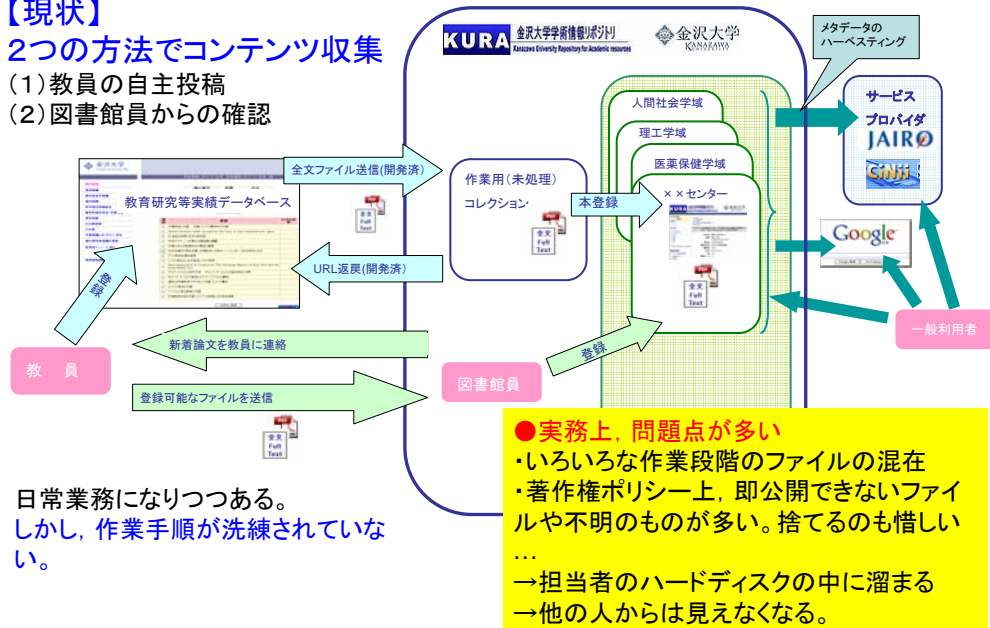


KURA今年度の事業(3) 業績DBのオプションとしてのIRへ(1)

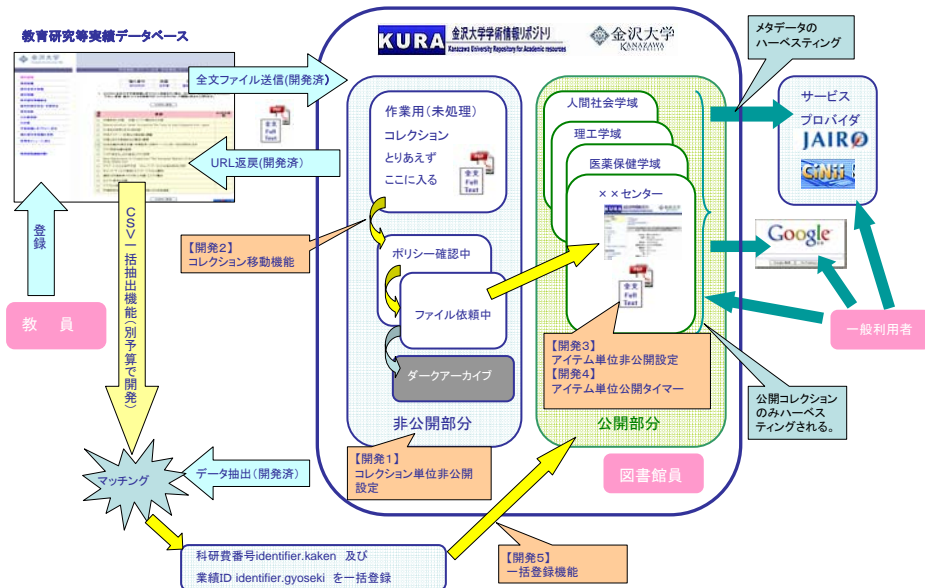
【現状】

2つの方法でコンテンツ収集

- (1) 教員の自主投稿
- (2) 図書館員からの確認



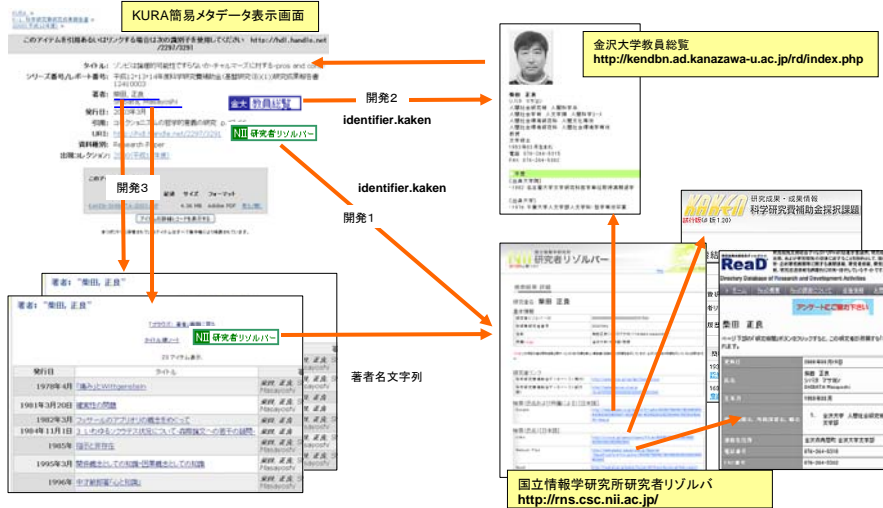
KURA今年度の事業(3) 業績DBのオプションとしてのIRへ(2)



KURA今年度の事業(3) 業績DBのオプションとしてのIRへの(3)

- 【開発1】「研究者リゾルバ」を利用した著者典拠機能
- 【開発2】「各大学教員総覧画面」を利用した著者典拠機能
- 【開発3】付随するリンク

条件: 著者同定キーとして identifier.kaken に 科研費番号が入力済



まとめ: 今後の方向性

